

## 子育てコラム29 parenting column

子育ては楽しいこともあるけど悩みもたくさん。  
そんなママのための役に立つアドバイス。

### 「子育て今昔(その2)」

昭和50年代は、生まれたばかりの赤ちゃんに対しても、“抱き癖”がつくので泣いてもすぐ抱かないようにとの考えが主流でした。今でもご年配の方は、子どもの自立を促すためにとそのようにおっしゃいます。

赤ちゃんは9カ月もの間、居心地よい子宮の中で安心して育ってきました。温かい羊水に身をまかせ、お母さんの腹壁に触り、時には臍帯を握り、お母さんの心音や声を聴きながら、穏やかに過ごしています。その環境が出産によって一瞬で変化します。何カ月も慣れ親しんできた環境が一変するという体験。聴くもの、感じるもの、触れるもの、そして光までもが激変します。重力のかけり方も違います。体の中でも血液の流れなど大きな変化が起きます。不安でいっぱいなことでしょう。抱っこされると安心して泣きやみます。

抱っこされたくて泣いている時には抱っこしてあげましょう。抱っこができない時は声を掛けてあげたいですね。子どもから何かを発信された時に何らかの手立てをする。これが信頼関係の基盤です。子どもは幾つになっても親との接触を求めています。子どもが

必要としたときに手を差し伸べることは安全基地の基礎づくりです。

時代が変われば、さまざまな考えや方法が異なるのは当然で、これからも子育ての考えややり方は変化していくでしょう。それでも、子どもを育てる上で昔も今も変わらない大切なものは沢山ありますし、子を思う親の愛情は昔も今も変わりません。

子育てには「どうしてもそのようにしなければならぬ」というものはありません。子どもへ愛情をかけ、子どもに最善の利益があれば、養育者の考えや思いで子育てをすればいいと思います。周りで見守ってくれている方たちの意見にも耳を傾けながら育てられるといいですね。



子育てひろっば「めぐみ」代表

**弘田 恵子**

子育てひろっば「めぐみ」代表。  
大阪府立母子保健総合医療センターNICUや母乳育児相談室で勤務。その後20年間高知市内のめぐみ保育園で園長を務め、4月から子育てひろっばで、妊娠中からの悩みサポートを行う。助産師、看護師、保育士、幼稚園教諭(二種)、上級睡眠健康指導士。

